

石和温泉の旅Ⅲ 2021



2021年9月

旅のチカラ研究所 植木圭二

山梨県笛吹市にある石和温泉、最近私たち夫婦はこの温泉に何かと縁があるようでこの旅行記も石和温泉第三弾になる。そして今回の宿選びは少し高い宿に泊まることを意識した。

第一章 8月の石和温泉

■再び石和温泉

先月生まれた孫のお宮参りを石和温泉でやるとのことで8月の石和温泉に家族でやって来た。今年に入って3度目の石和温泉になり、今回は少し趣向をかえて高い旅館に泊まることにした。

今から20年くらい前、妻が商店街の抽選会で石和温泉の日帰りバス旅行を当てたので夫婦でそのバス旅行に参加した。観光名所を巡り、石和温泉のホテルで昼食を食べ、ホテルの風呂に入るというものだった。観光や料理は全く覚えていないが、ホテルの風呂が“ワイン風呂”ということだけは覚えており、今回そのホテルに泊まってみようということになった。

調べてみるとワイン風呂のあるホテルは「ホテル八田」で、今でもワイン風呂を宿の売りのひとつにしている。嬉しいことに夕食なしの1泊朝食付プランがある。なぜ嬉しいかという、昼はお宮参りの会食で豪華な昼食になるので夕食はそんなに食べられないと思ったからだ。

■ワイン風呂

宿に着いて早速お目当てのワイン風呂に行ってみる。ワイン風呂は7階にあり展望風呂になっていて、その眺望はというと石和温泉街のメインストリート「さくら温泉通り」が眼下に見えるから、桜の季節には満開の桜を眺めながらのワイン風呂という贅沢な花見体験ができる。



【ワイン風呂 宿のHPより】

ワイン風呂に浸かってみるとやはり見覚えがある。20年前に来た時と同じだが、今回は甘ったるい香りも加わっているような気がする。香りも含めてワイン風呂はいい仕上がりになっている。

ワイン風呂の生成過程が書かれているパネルが架かっており、単なる入浴剤ではない旨がアピールされている。ブドウから赤ワインを造っていくつかのろ過工程を経て粉末化すると書いてあるので、最終的には粉末になる。そうすると入浴剤として売ることでもできそうだ。

その粉末を石和温泉の源泉に加えている。幸いにしてこの源泉は低張性で温泉成分があまり濃くないために相性がいいのかもしれない。

■露天風呂が素晴らしい

20年前はワイン風呂のみに入浴しただけで他の風呂は体験していないが、普通の温泉の大浴場もあり、露天風呂が併設されている。その露天風呂入口には「石和温泉で一番大きい露天風呂」と書かれた看板が架かっており、私は期待して扉をあけた。

露天風呂は岩風呂で、確かに広く、そしてたくさんの湯船に分かれている。一番高いところにある湯船は源泉が流れ込んでおり結構熱く、おそらく43℃くらいだろう。その下にある湯船から徐々に温度が低くなっており、一番大きな湯船が一般的に入りやすい40℃～41℃、そしてもう少しぬるい湯船がその下にある。従って自分にとって適温のお湯を選ぶことができ、さらそれらの湯船はどれもがちょうど良い深さになっておりとても入浴し易い。

一般的に岩風呂を評価する基準は使っている石の大きさだと言われている。この石を見てみると、どれも比較的大きい。湯船をたくさん造る都合上、そんなに大きな石を使うことができないが、結構立派な石を使っているから岩風呂としては十分に及第点だろう。

“〇〇で一番”と書かれていると往々にして期待を裏切ることが多いが、この露天の岩風呂は私の期待を裏切らなかった。

これだけ岩風呂が充実しているのに、なぜかここには岩風呂以外に平たい石を四角く囲った石の風呂もある。温度は比較的温い設定で長湯ができそうだ。

さらに石の風呂の隣には小さな小屋があり、その小屋の中にも岩風呂がある。ちょっと暗めの洒落た小さな電球の明かりが小屋の中全体を照らしている。何のために小屋の中に岩風呂を造ったのか理解できないが、少なくとも雨が凌げるのはありがたい。湯に浸かって小屋の壁や天井を眺めていると秘湯の宿のような独特の雰囲気を感じる。



【露天風呂】



【内風呂から見た露天風呂、石の風呂、小屋】

■女将と話す

翌朝はロビーでくつろぐが、このロビーがなかなか素晴らしい。ロビーの前には大きな池があり、その池とロビーの間は大きなガラスで仕切られているのだが、池の一部がガラスの内側つまりロビーにも入り込んでいる。言い換えるとロビーにも池があって、ガラスの仕切りの下で外の池と繋がっているという構造になっている。池には鯉がたくさん泳いでいて、その鯉の群れがロビー内の池にもやってきている。見るとロビーで鯉に餌をあげている人がいるから集まってくるのだが、これはなかなか考えられた構造になっていると感心してしまう。

感心ついでのロビーにはグランドピアノが置いてあって、昨夜はここでピアノの生演奏をやっていた。



【ホテル八田のロビーと庭園 外の池とロビー内の池は繋がっている】

そのロビーで写真を撮っていると、若い女性従業員が「お撮りしましょうか」と声を掛けてきた。撮影を頼んで、少し言葉を交わしたついでに私が質問をした。

「石和温泉の中心地に昔この地域を治めていた八田家の屋敷があるけど、このホテル八田はその八田家と関係あるの？」と聞くと、彼女は困ったような顔をして「実は私はこの宿に来てまだ2週間なので、女将に聞いてみます」と言う。

そんなやり取りが聞こえていたらしく、女将が近づいてきて私の質問に答えてくれた。「御朱印状をもらってこの地を治めていた八田家は私どもの先祖にあたり、このホテルもあの八田家の分家ですが一番出来が悪い家になります」と謙遜している。

私が「そんなご謙遜を、このホテルのロビーも露天風呂も素晴らしいじゃないですか」と言うと女将は苦笑いをしている。さらに私が「あのワイン風呂は良いアイデアですよ、考えたのは女将ですか？」と水を向ける。女将は「あれはお客様のアイデアなのですよ、最初は単なる展望風呂でしたが、お客様からそのアイデアが出てきたのですよ」と言い、さらに付け加えて「最初

は本物のワインを入れていたのですが、みんな流れてしまってダメなのですよ」と言う。私は「それで入浴剤風のを開発したのですか」と訊ねると、女将は「その開発も結構大変でした」と応じる。さらに私が「あの入浴剤を販売したらどうですか？」と水を向けると、女将は笑って受け流していた。

おそらく入浴剤を売ってしまったら、この宿にワイン風呂目当てにやって来るお客に申し訳ないと感じているのかもしれない。

第二章 9月の石和温泉

■隠れ家的な宿

9月になって笛吹市宿泊割が再開されたので再び妻と石和温泉にやって来た。笛吹市宿泊割とは石和温泉がある笛吹市の観光支援策で1万円～2万円の宿泊には5千円、2万円以上の宿泊には1万円の補助金がでるというもので、今回私は2万円以上の宿2軒を予約した。

初日の宿「糸柳別館 和穰苑」は石和温泉の中で比較的静かな住宅街にひっそりと建っている隠れ家的な宿だ。“別館”がついていない「糸柳」という旅館は石和温泉の中でも有名な老舗旅館で地元の人に聞くとみな一目置いている。石和温泉は昭和36年に突如湧き出た温泉地なのでどの宿もその頃創業のはずなのに老舗というのはおかしいと思う人がいるかもしれないが、実は糸柳は料理屋として明治12年に創業して、温泉が出たのを機に温泉旅館になったという。

当初はその糸柳の本館の方に泊まろうとしたが、笛吹市の宿泊割引の枠が既にいっぱいになっており、かろうじて空いていた別館を予約した。



【糸柳別館 和穰苑の玄関】

宿は2階建ての比較的小さな建物で木のぬくもりが感じられる。ロビーは小ぢんまりしているが落ち着きがあり、いかにも隠れ家的な雰囲気がする。

チェックイン時に明日の朝は何新聞を読むのかを聞かれ、5~6紙の中から選ぶようになっている。朝刊が部屋に届けられる宿はよくあるが、それを選べる宿は珍しい。このサービスは大きな宿では真似できないだろう。宿泊者の部屋の数だけ全ての新聞を毎日全て取っているとは到底考えられない。新聞販売店には新聞が必ず余分に配送されるので複数の新聞を扱っている新聞販売店と契約して、前日に連絡しておけば明朝には所望の新聞をそれぞれの部数を届けてもらうようにしているのだろう。それにしても実にきめ細かなサービスをしている。

通された部屋は8畳の居間で、座卓が真ん中に置かれ床の間の横にテレビがある。ごく普通のまあまあの部屋だと思っていたら、驚いたことにもう一つ部屋がある。畳の間だがベッドが2つ置かれており、こちらにもテレビがある。この2つの部屋は襖を開けて直接行き来することもできるが庭に面した廊下で繋がっていて、廊下は畳敷きになっている。この畳の廊下部分には窓に向かって机が置かれており、窓越しに芝生の庭を見ながら書き物をしたり本を読んだりできる。そして座るために座布団ではなくお洒落な低い椅子が置いてある。

今回はパソコンを持ち込んでの宿泊なので、机でパソコンを開いて座って庭を眺めると作家になったような気分になるのは私だけではないだろう。



【畳敷きの廊下にある机 芝生の庭を眺める】

階段の踊り場やロビーにはソファとコーヒー、そして本棚に本がある。宿泊客が持ってきた本かと思ったが、新しさからしてこの宿に泊まる客層に合った本をこの宿で買っているのだろう。

■温泉で瞑想

お風呂はもちろん温泉だが、最初に入った時の印象は「え、これだけ」というのが正直な感想だ。それくらいシンプルな風呂で、ただ湯船と洗い場はそれなりに広く、カランはゆとりをもって3つある。コロナ対策でひとつおきにカランを使用している宿は多いが、この宿は最初から間隔が広くとってある。ということは同時に風呂に入る人数は、通常は2~3人を想定しているのだろう。今回私は何度も風呂に入ったがほとんどが貸し切り状態だった。



【和穰苑の風呂（内風呂）】

照明はカランの上に小さなライトがあるだけであとは外光頼りだが、あまり明るくない。私は他に電灯のスイッチがあるのだろうと探したくらいだ。

お湯は絶妙な温度になっている。熱くもなくぬるくもなく、おそらく40℃くらいなので長湯もできる。そして長く湯に浸かっていると目が暗さに慣れてきて、誰も入ってこないで温泉の出口から流れる出る湯の音だけが聞こえ、まるで瞑想をしているかのような気分になってくる。実に不思議な感覚に陥る。

露天風呂も併設されており、時間による男女入れ替え制になっている。木製の湯船は気持ちいいがどこにでもありそうな露天風呂で、もちろん外なので明るい。印象的だったのは蚊取り線香が四角い湯船の対角線状に2個置かれていたことだ。

ロビーには缶ビールが氷の上に置かれてキンキンに冷やされている。一番小さい135mlの缶ビールだが、ビールは湯上りの最初の一口が一番美味しいので、それを味わうには適度な量だ。別に何本も飲んでも構わないから飲みたい人は飲めばいいのだが、このサイズにこだわる宿の意思のようなものを感じる。

ビール以外にもコーヒー、ジュースも置いてあるが、普段はあまりビールを飲まない妻もそんなサイズなので満足そうにビールを飲んでいる。彼女は宿の術中にはまっているようだ。

■驚きの夕食

夕食の案内はちょっと気が利いている。時間になったらロビーに来てくださいとのことで担当の女性スタッフがロビーで待っていてくれた。彼女は和服美人で年の頃なら30代で白い着物が似合っている。その彼女が食事処まで私たちを案内してくれるのだが、食事処の表示がないので案内してもらわないとたどり着けない。この宿は人と人の繋がりを大切にしているのかもしれない。

通されたのは二人用の個室でテーブル席になっている。品書きに沿って一品ずつ案内の彼女が運んできてくれて、料理の説明をしてくれる。

最初は不老長寿の薬と言われる「枸杞（クコ）の実の養老寄せ」で雰囲気抜群の入れ物に入っ
て、味覚も視覚も赤ワインとの相性がいい。

次の「納豆仕立ての半月焼き目豆富」は秋の名月を連想させるもので、海老の香りが強く見た
目よりも味にインパクトがある。品書きで“豆腐”と書かずに“豆富”と書くところは料理長の
粋な計らいで、やはり腐よりも富の方が気持ち良い。しかしそれは日本的な感覚で、豆腐は中国
から入ってきたもので、腐という漢字は中国では固まるという意味なので腐った豆ではない。少
し話が脱線するが、同様に中国から伝わったらしい納豆がある。この納豆と豆腐は伝来時に名前
が入れ替わったという説がある。確かに豆が腐ると豆を箱に納めて固めるではその入れ替わり
説はもっともらしい。かつては私もその説を信じていたが、今では飲んだ時のネタにしか使わな
くなくなった。



【枸杞（クコ）の実の養老寄せ】



【納豆仕立ての半月焼き目豆富】

次の料理は「旬菜盛り」で、月見の団子とウサギの海老が見事な感性で盛り付けられている。
「一口にぎり」の寿司はとろけるようなトロで、海なし県に来ているとは思えない。
「本日の御菜」は茄子、これは至って普通だが、皿が凄い。
「甘鯛と早松」は鍋物で、甘鯛と松茸と麺も入っている。早い松茸なので早松なのだろう。



【上：旬菜盛り 下：本日の御菜】

【上：一口にぎり（2人前） 下：甘鯛と早松】

「甲州牛あぶり」は陶板でも鉄板でもなく水晶板で焼く野菜と甲州牛の焼き物になる。なぜ水晶板で焼くのか、和服美人の説明では水晶はこの地方の特産だったという。その水晶板に驚いていたが、本当に驚いたのは焼く板の方ではなく焼かれる甲州牛の肉の方で、実に柔らかい。この柔らかさは、とろけるようだとは言い過ぎだが、先ほどの豆腐くらいの歯ごたえだ。

「おさめご飯」と書かれたものは、ご飯が炊いた釜ごと出てきた。中身は里芋の炊き込みご飯で、里芋を使うのは珍しいと妻と話ながら口に運ぶと、いい食感でいい味加減になっている。



【水晶板と甲州牛と野菜】



【釜で炊きたてのご飯】

最後のデザート「香々 甘味」は驚きの演出になっている。シャインマスカットが小さなブドウ棚になって出てきた。横にはハサミが添えられているから、収穫してくださいという意味だろう。同じシャインマスカットでも普通に皿で出されるのと、自分でハサミを使って収穫して食べるのでは全くもって気分が違う。この演出には驚き、感激し、もはや笑うしかない。いろいろな宿でいろいろ思考を凝らした料理を見てきたが、これは極めて独創的で季節とブドウの産地を感じさせてくれる。ブドウ棚の下には心太（ところてん）が小さな器に入っている。味付けは酢醤油ではなく黒蜜になっているから信玄餅を連想してしまう。



【デザート「香々 甘味」】

■飯ごう炊飯の朝食

朝食はさすがに一品ずつではなくまとめて置かれている。しかしながらちょっとした宿の夕食くらいの豪華さがある。朝食にしては珍しく品書きが置かれており、料理長の日本料理に対する思いも書かれている。その内容は日本料理が日本文化の中心にあるというもので実に楽しく読ませてもらった。

そしてまた珍しい料理が私たちの目に留まる。温泉卵に人の顔のような絵が描いてあって、お風呂に入っているかのように頭にはタオルに似せたベーコンが乗っている。妻はこの演出がたいそう気に入ったようで、なかなか温泉卵を割ろうとしない。



【温泉卵とベーコン】

間もなくご飯が出てきた。使い込んだ兵式飯ごうで焚いたもので飯ごうが蓋をした状態で出てきた。この演出は最近のキャンプブームにあやかって実に楽しい。

お好みでという言葉添えてカレーも出てきた。昨今は朝からカレーを好んで食べる人も多いが、確か大リーグに行ったイチローが朝カレーを食べていたのでブームになった。



【朝食 右手間が飯ごうのご飯】

和服美人に食後のお茶を入れてもらっている時に私はどうしても聞きたいことがあって質問を試してみた。「私たちは糸柳の本館では食事をしてだけで泊まったことがなく、いずれ泊まりたいと思っているけど、この別館と本館は宿の格はどちらが上ですか？あるいは2つの宿はどういうすみわけになっていますか？」と私が聞く。

彼女は「こちらの和穰苑の方が少し格上で、こちらは個人のお客様だけですが、あちらは団体のお客様もお泊めしております」と答えた。

■チェックアウトまでのひと時

チェックアウトまで、私は何度も温泉に浸かり作家になったつもりで庭を眺めながらパソコンのキーボード叩いている。一方で妻はいろいろな本をロビーから部屋に持ってきて斜め読みをしている。この宿の本のセンスが気に入ったようだ。

コーヒーを飲みながらの朝のひと時は実に気持ちが良い。それもこのような宿ならなおさらで、宿の方もそのあたりは心得ているのだろうか、チェックアウトの 11 時はその配慮かもしれない。残念ながらチェックインは 15 時だったが、昨日は電話をかけて交渉して 30 分ほど早めてもらった。宿をメインにした旅はやはり宿に長く滞在することが肝要だろう。

ロビーで私たちがチェックアウトしようとしていたら花屋が生花を届けに来た。本日だけ特別に持ってきたのではないらしく、花屋は勝手知ったる我が家のようにいつもの場所に運んでいるようだ。

ホテルや旅館の良し悪しを見分ける方法で、生花が有るか無いか、それも毎日変えているかということ聞いたことがある。本日は金曜日、新しい花を活けて週末に備えるということだろう。そしてそれらの花は日々ローテーションして場所替えをするのが一般的らしい。

■将棋対局の宿

次の宿に行く前に石和温泉の北東約 30km にある景勝地「西沢溪谷」に行ってみた。あいにくの雨で、入口付近を散策しただけだが、天気良ければ約 10km の散策になるはずだった。

2 日目の宿「石和常盤ホテル」は石和温泉街の東の端にある鉄筋コンクリート 6 階建てのホテルだ。ロビーには将棋のタイトル戦の対局場になった時の写真が飾られており、羽生九段が写っている。将棋対局に使われる宿はそれなりの格の宿で、この宿もその品格が感じられる。

案内された部屋は 6 階で、10 畳の和室と広縁にあたる部分は 4 人でゆったり座れるソファーが置かれており応接室のような感じがする空間になっている。ソファーの他には大きなテレビや冷蔵庫、本格的なコーヒーメーカーもあり、実質的には 2 部屋あるようなものになっている。

窓から見える景色は目の前に大きなゴルフ練習場があるが、少し目を横にそらすと遠くに山並みが見えてフルーツ公園を臨む。5 月に泊まった「別邸 花水晶」を見下ろすことができる。



【手前が寝室 その奥が広縁】



【窓からの景色】

■湯上りはアイスクャンデー食べ放題

到着して間もなく風呂に行く。和穰苑で先ほどまで温泉に浸かっている、同じ石和温泉の湯だが、将棋のタイトル戦の宿の風呂は気になるものだ。

その風呂は鉄筋コンクリートの中高層ホテルによくあるタイプの大浴場で、1階のフロアの一角を大浴場としている。大浴場は内風呂がメインで、外には後から追加されたような心ばかりの露天風呂がある。おそらくは露天風呂ブームに乗り遅れまいと大浴場の前の坪庭のようなスペースに露天風呂を後付けで造ったに違いない。露天風呂は無理すれば3人は入れるようなサイズだが、コロナ禍の現在では一人用と言った方がいいかもしれない。

内風呂はタイル貼りの大きな湯船で広くて明るい、特段目新しいものはない。しかし脱衣場には嬉しいサービスがあって、「湯上りにアイスクャンデーをどうぞ」と書かれたプレートが冷凍庫の上にあってガリガリ君とホームランアイスが大量に入っている。こんなサービスでも有るか無いかで印象は大きく異なる。人間は格安や無料に弱い。

私も妻もかなりの本数のアイスクャンデーを2日間にわたって食べ続けることになった。

■食べきれない夕食

夕食は個室ではなく、夕食会場での提供になる。広い会場に15くらいのテーブルが密を避けて間隔をとって置かれている。宿泊客は30人強というところだろう。

昨夜の宿のように一品ずつ提供されるのではなく、ほとんどの料理は既に食卓に並んでいる。それにしてもとんでもなく料理が多い。メニューを見ると甲州牛のステーキ、甲州牛にぎり寿司、甲州牛しゃぶしゃぶと甲州牛尽くしになっている。その他にアワビの陶板焼き、ふかひれ饅頭、松茸ご飯の釜めしと豪華極まりない。



【宿からもらった全ての料理の写真】

固形燃料の卓上コンロの数が3つもある。コンロの数で評価が決まる訳ではないにしても食卓で焼きたてを食べることができて、とにかく豪華に感じる。もちろん見た目の豪華さだけでなく食材も良く、味付けもいい。とにかく甲州牛は柔らかくてとても美味しい。

しかしながらこれだけの分量はそうは食べられない。私も妻も通常は出された料理は残さずに食べる方だが、さすがにその辺の旅館の料理とはレベルが違ってとても食べきれない状況ではない。

その様子を見ていた仲居さんが「ご飯とデザートは部屋に持ち帰れますが、お持ち帰りしますか？」と聞いてきた。私は二つ返事で「お願いします」と答えて、固形燃料の卓上コンロで焚いた松茸の炊き込みご飯を蓋付きのご飯茶碗に移してもらって、シャインマスカットのムースとかぼちゃプリンのご飯と一緒にご飯に持ち帰る。

食前酒	山梨県産 スモモのお酒 貴陽
前 菜	季節替わりの五品
お造り	日本近海 直送生本まぐろ 甲州名物 謹製あわび煮貝
焼 物	山梨県産サーモン 富士の介 柚子味噌焼き
お凌ぎ	甲州牛 にぎり寿司
台の物	鮑の陶板焼き
中 皿	甲州牛 ステーキ
煮 物	ふかひれ饅頭 菊花庵掛け
鍋 物	甲州牛 しゃぶしゃぶ
食 事	松茸釜飯
留 椀	なめこ汁
香 物	三種
水菓子	おまかせデザート

【夕食のメニュー】

せっかく持ち帰った松茸ご飯なので夜な夜な食べたが、残念ながら冷え切っていて風味も何もない。それでもデザートは美味しくいただくことができた。

■朝食に牛丼

翌朝、朝食会場に行って食卓に着いたら最初に仲居さんから聞かれたのは「牛丼か白米かをお選びいただけますが、どうされますか?」、私は「朝から牛丼ですか・・・初めてですね。それも面白いので牛丼にしよう」と答える。回りを見ていると私と同じように多くの宿泊客は驚いて、そして牛丼を注文している。

食卓には固形燃料の卓上コンロが2つあり、1つは味噌汁、もう1つは豚肉の陶板焼きになっている。料理は昨夜の夕食程ではないにしても豪華で種類も多い。

ここでまた驚くことに遭遇する。テーブルには生卵がたくさん用意されており、仲居さんは「卵は豚肉の陶板焼きに落とせば目玉焼きになります、味噌汁にかき卵で落とすのも美味しいです、もちろんTKG（卵かけご飯）でも美味しく食べられます」と教えてもらう。

私は卵2個をとって1つは陶板に落として目玉焼きに、もう1つは黄身だけを牛丼に落とし、白身は味噌汁に落としかき卵にした。生卵を活かすことができるのは朝食でも卓上コンロが2つあるからだろう。

朝からの牛丼は結構美味しい。妻は「昨日の甲州牛を使っているみたいね」と言っている。確かに吉野家の牛丼のように脂身が多くなく適度の脂で柔らかいから、妻の予想はあながち外れでは無いようようだ。



【朝食 右手前に牛丼】

本日も 11 時チェックアウトの宿なので、ギリギリまで温泉を楽しみ、アイスクャンデーを食べ、存分に楽しむことができた。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひよい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって各項目を 5 段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

総合点（平均値）で 5 段階の 75%、つまり 3.75 をオススメの目安としている。特に 4.00 を超えるには驚き感動が少なくとも 1 項目以上あるからオススメ度は高い。

「ホテル八田」は泉質 4、風呂 5、料理-、コスパ 3、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 3、総合点 3.83 になった。泉質はワイン風呂を評価し、料理は朝食のみで評価しなかった。

泉質は低張性アルカリ泉、pH は 9.1、湧出温度は 45.9℃、他の宿もほぼ同じ泉質になっている。

「糸柳別館 和穰苑」は泉質 3、風呂 4、料理 5、コスパ 3、サービス 5、建物・部屋 5、立地環境 4、総合点 4.14 になった。泉質は風呂の温度管理を評価した。

「石和 常盤ホテル」は泉質 3、風呂 4、料理 5、コスパ 3、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 3.86 になった。泉質は風呂の温度管理を評価した。

■旅の記録

1 回目の実施は 2021 年 8 月 21 日（土）～22 日（日）の 1 泊 2 日、その行程を以下に示す。

- ・ 1 日目 午前中に笛吹市の山梨岡神社にてお宮参り、親族でホテル千石にて昼食の会食
16 時に「ホテル八田」にチェックイン、夕食は丸亀製麺にて讃岐うどん
- ・ 2 日目 10 時に宿を出発、帰宅

1 回目の費用は大人 2 人合計約 3.2 万円になった。

- ・ ホテル八田 12140 円（1 泊朝食付 12140 円×2=24280 円）
- ・ 夕食代、飲み物など 約 1000 円
- ・ 交通費約 7000 円（高速道路 5020 円、往復約 200km のガソリン代約 2000 円）

2 回目は 2021 年 9 月 2 日（木）～4 日（土）の 2 泊 3 日、その行程を以下に示す。

- ・ 1 日目 昼過ぎに車で自宅出発、14 時 30 分に「糸柳別館 和穰苑」にチェックイン
- ・ 2 日目 11 時チェックアウト、雨の西沢溪谷を散策し、14 時 30 分「石和常盤ホテル」に
チェックイン
- ・ 3 日目 11 時チェックアウトし帰宅

2 回目の費用は夫婦 2 人で約 6 万になった。（以下全て 2 人分）

- ・ 糸柳別館和穰苑 29360 円（1 泊 2 食付 23650 円×2、入湯税飲み物入れて 49360 円、
笛吹市宿泊割 10000 円×2 を適用）
- ・ 石和常盤ホテル 22850 円（1 泊 2 食付き 20900 円×2、入浴税飲み物入れて 42850 円
笛吹市宿泊割引 10000 円×2 を適用）
- ・ 昼食代飲み物など約 1500 円
- ・ 交通費約 6300 円（高速道路 4360 円、往復約 200km のガソリン代約 2000 円）